

# JLSR ニュースレター

## 私のライフストーリー研究の原点

桜井 厚

先日、中国の広州市の大学で教員をしている張嵐さんからメールがあった。10年余り前に日本で出版した『中国残留孤児の社会学——日本と中国を生きる三世代のライフストーリー』の中国語版を新たな資料をくわえて出版するという。その「序」を書いてくれとの依頼であった。彼女が、当時、私が勤めていた千葉大学大学院に入学したのが20年近く前である。入学後に指導教員になったものの1年後には私自身は立教大学へ異動し、指導は同僚に託さざるを得なくなった。彼女は修士から博士課程へ進んで就学年限最短で学位論文を書き、優秀論文賞をもらって学位を取得した。修了後に私のいる立教大学で特別研究員になって、日本語版を出版し、3年ほどのちに帰国して教員生活を始めたのだった。

私自身としては指導らしい指導はしていなかったのだが、中国では日本語学科卒で社会学も十分学んではいなかったにもかかわらず、大学院を通じてライフストーリー研究法が彼女の主要な研究法になったのは間違いなかった。「序」に、私はライフストーリー研究法が彼女に適した研究法だと書いた。会った時から、彼女の卓越した日本語能力だけでなく相手に敬意をもって接するコミュニケーション能力に驚嘆していた。日本で経済的困窮、社会的孤立などの不安を抱える中国帰国者にとって、彼女のようにバイリンガルで接してくれる若者とのコミュニケーションは、安心でき癒されるインタビュー空間を提供したであろう。そう思ったからである。

話がいくらか横道にそれるが、ライフストーリー研究法に適不適があるかはよくわからない。「あの人は向いてない」と言ったら身も蓋もないが、ひとは学習能力も自己変革力もあるものの、それでもひょっとすると向き不向きはあるのかもしれないと思う。話し上手や聞き上手も大事なコミュニケーション能力であるが、なかでも自己反省力は必須ではないか、と思われる。自己を対象化する力というべきだろうか。

さて、張さんの本で印象に残った一節がある。日本語版の序文で、彼女は、この研究成果が日中相互理解の橋渡し役となることを願っていた。残留孤児の生活世界の研究を通して、日中の戦後史を反省的にとらえなおそうとしていて、残留日本人孤児を育てた中国の養父母にも会ってインタビューを行った。「戦時中、日本人はひどいことをしたのに子どもをひきとったのはどうして」という彼女の問いかけに、ある養母は「それは考えなかった。それは国家と国家のことで、私たち百姓とは関係ない。日本人も生まれつき人をいじめることが好きなわけではない。…私はただ自分の良心を信じる」と答えている。

この養母の言葉を聞いて、私はもう半世紀以上も前、社会学を始める前に読んだある小説のシーンを思い出した。第一次戦後派作家のひとりとされる椎名麟三の小説だったと思う。お気に入りの作家だった。彼は戦前、日本共産党に入党、特高に検挙され獄中で転向、その後ニーチェ、キルケゴール、ジンメル、ドストエフスキーなどに

影響を受け、戦後、作家の道へ進む。実存主義的作風といわれた。そうした思想の遍歴にも共鳴するところもあったのかもしれない。もはや作品名も覚えていないのだが、ある農村の母と息子(あるいは老婆と孫)であったか、敗戦日当日、息子が息せき切って家へ帰り、「たいへんだあ、戦争に負けたあ！」と叫ぶ。それを見た母は「アホか、早く薪集めてこい」と叱り飛ばすというシーンである。上記は、小説の言葉通りではなく記憶による創作だが、私は国家レベルの「敗戦」のナラティブとまったく別次元の日常生活を生きる母の応答に驚き、椎名の世界観に感嘆したのだった。

先の養母の言葉は、この農婦にそっくりである。そこには日中という違いはない。これは一人ひとりが紡ぎだす生活世界の語り、国家次元の大きな物語とは異なる物語を持っていることを雄弁に物語る。家族の関係や愛情、地域コミュニティの連帯や故郷への思いは、国家という次元とは異なり国境を越えて人と人がつながる可能性をもつということだ。ライフストーリーを通した生活世界の理解とは、一人ひとりの人生や経験を大事にして、それをもとに地域社会やさまざまな集団、そして国家次元の全体社会を照射あるいは逆照射していくことなのである。張さんの日中の橋渡しとは、そのようなベクトルを含むものと理解したい。そして、この養母や農婦の言葉は私のライフストーリー研究の原点といえるかもしれない。

(さくらい・あつし 日本ライフストーリー研究所代表)

## LS 研 特別研究会 《開催報告》 みんなでじっくり語り合おう VOL.2

2024年1月21日(日)に第2回特別研究会を開催しました。「みんなでじっくり語り合おう VOL.2 ライフストーリー研究における調査者としての私」と題し、異なる専門分野3名の報告者をお招きして、その基調報告をもとに、グループワークを行いました。

以下に、参加者の感想(抜粋)を掲載します。

○ポジショナリティと社会構造の中の立ち位置、マジョリティやマイノリティという言葉について考えることができました。

○グループワークはとても有意義な時間になりました。議論の途中で時間切れになってしまったのが、残念でしたが、自分とは異なる分野の方の意見が聞けてとても良かったです。

○当事者が当事者に行うインタビューと非当事者が当事者に行うインタビューの違いや、調査者のポジショニングについてなどが話題になりました。インタビュー調査を実際に行った人も、インタビュー調査について知りたいという人もいるという状態でしたので、むしろ気負わずに基本的なことも質問することができ良かったです。

○個人や分野によって、ポジショナリティの捉え方が非常に多様であることが実感できました。同時に、議

論が曖昧に感じられることもありました。ひとつの定義を正解としないまでも、特にアイデンティティとの混同を避けるために、ポジショナリティとは何かを、ある程度は明確にする議論の機会があってもよいのではないかと考えました。

○いろいろな分野の方のお話が聞けて、おもしろかったです。ただ、お話を聞くにつれ、「ポジショナリティ」って、そんなに大事なのかなと思いました。インタビュアーがポジショナリティを自覚しすぎると、聞きたいことも聞けなくなるような、負の作用もあるのではないかと考えたからです。研究のためのLS研究にならないためにも、発表者の山本さんがおっしゃっていたように、なるべくフラットな気持ちで、フラットに近い立ち位置でいるのが理想だと思います。

○通常のLS研よりも抽象度が高い内容(自分の調査者としてのポジショナリティや今後のLSを行なう上での展望やLSの限界...)を含め、メタ的な議論ができてとても勉強になりました。今後、LSと他の調査法との関連性や他調査法を組み合わせることで、さらなるLSの可能性を高めていけるような議論ができる機会があればありがたく存じます。

○西倉先生のご講演の中の、非当事者が当事者のライフストーリー研究を発表する意味(意義)の部分が印象に残りました。非当事者だからこそその気づき、またそこから見えてくるものがあると改めて思いました。

○初めて調査者である自分の立場性について気づきました。今までは語り手の語りの意味付け、解釈及び

その変化を重視し、分析してきましたが、調査者である自分の立場性を明確にしないと、インタビューの場で構成された語り手のライフストーリーを十分理解、分析できないということがわかりました。

○調査者自身が浮き彫りにされることで、聴衆である自分に引きつけて聞くことができ、刺激を受けました。

## 第19回ライフストーリー 調査研究講習会の報告

2024年3月24日(日)に第19回ライフストーリー調査研究講習会を開催しました。今回は、「ライフストーリー研究における対話的構築法の基礎理論」をテーマとしました。

以下に、参加者の感想(抜粋)を掲載します。

○本日の講習会でライフストーリー研究の理論的背景を深く学び、この分野に対する関心がさらに高まりました。また、自身の先入観にとらわれずに、調査協力者の語りのコンテキストを深く理解するための、多くの解釈の視点を学びました。調査協力者の人生の転機をどのように解釈するかは難しい問題でしたが、「コンボイ」という概念を学びましたので、再度インタビューデータを見直したいと思います。

○重いテーマの扱い方やライフストーリーの存在意義、調査者としての方法論で学ぶところや考えるところが多々ありました。

○特に歴史的な話が入ったことで、他の質的調査方法との違い等を分かりやすく理解することができました。また、ブレイクアウトセッションを用いた事例検討の時間は、他の受講生との考え方の違い等を意見交換し、調査を行う上での注意すべき視点等、より理解できました。

○対話的構築主義の歴史を知ることができ、とても学びになりました。看護では看護師と患者の関係を看護過程と言って、対話構築主義と同じように考えます。しかし、看護過程に関しては十分に論述されていないために、関係を構築する重要性を気付いていない人が多いように感じています。

○これまであまり認識していなかったコンボイの概念や、社会の個人の語りへの影響(アイデンティティの多

面性に伴って語りが変わることから生じる複数の真実)についても、大変勉強になりました。

○今回はライフストーリーとシカゴ学派の接点がどのようなものであるかを確かめたいと思い参加いたしました。ライフストーリーのインタビューの成否は、行為者の観点を取得するということと考えますが、その重要性を改めて感じたところです。

## ライフストーリー研究会 例会報告

日時:2024年3月10日(日) 13:30~16:30

報告者:池上賢 (拓殖大学)

報告タイトル:マンガ経験の2000年代以降—メディア環境の変化とライフステージから考える。

概要:筆者は2019年に上梓した拙著『“彼ら”がマンガを語る時、』(ハーベスト社)において、1947年~1986年に生まれた人々を対象としたライフストーリーインタビュー調査を行い、戦後のマンガがどのように経験され、人々にとってどのような意味があるのかを明らかにした。一方、拙著において明らかにできたのは主に1990年代までのマンガ経験である。筆者は現在、第2次となる調査を進めている。以上を踏まえて、本報告会では、特に「2000年代以降のマンガ(との周辺のメディア)がどのように経験されて来たのか?」とテーマの研究に取り組むため、機縁法によって収集した筆者(1978年生まれ)と同世代の人々のライフストーリーインタビューデータに対する探索的な分析を実施する。1990年代から2000年代においては、インターネットの登場と紙媒体の衰退という大きな変化があると同時に、筆者と同世代の人間は、進学から就職、人によっては結婚・子育てなど様々なライフステージを経験しているが、それらとマンガ経験の関係性もテーマとなる。

## ライフストーリー研究会 6月例会のお知らせ

日時:2024年6月16日(日)13:30~16:30

場所:日本ライフストーリー研究所

リアル参加(5名ぐらい)およびオンライン参加

報告者:松本美香子さん(早稲田大学大学院)

**報告タイトル:** 東日本大震災を経験したカトリック信徒  
の信仰の意味と言語使用

**概要:** 本発表では、東日本大震災を経験した日本人  
信徒(S氏)、外国人宣教師(A氏)、外国人信徒(R氏)  
の語りから、それぞれが、どのように教会と関わりなが  
ら日本での生活を送っていたのか、日本での言語使  
用はどのようなものだったのか、を明らかにする。



やっと咲き始めた  
コブシ(標高 1,000m)

★報告者は随時、募集中です。  
メールにてお問い合わせくださ  
い。語りの地平 Vol.9 に投稿希  
望の方は、ぜひとも、報告をお  
願いたします。

## 『語りの地平』Vol.8 の合評会を開催しまし

『語りの地平』8号の論文の合評会が、以下の要領  
で開催されました。

**日時:** 3月3日(日) 13:30~17:00

**プログラム:** (各報告:15分、各討議25分、休憩10分、  
全体討議40分)

1. 安東明珠花: コーダ同士の対話の考察
2. 宮地弘子: 柔軟で裁量的な働き方の実現に向けて
3. 張羽欣: 「出生を望まなかった女性」のライフス  
トリー
4. 打保由佳: ある地域の障害者運動家のライフヒスト  
リー

### 森岡清美資料室開設記念シンポジウム 森岡清美の社会学研究と調査法 参加者募集のご案内

森岡清美資料室の開設を記念して、6月1日(土)13:30~16:30、以下のとおり記念シンポジウ  
ムが開催されます(ハイブリッド開催: ライフストーリー研究所現地参加10名・Zoom)。期日が近づき  
ましたら、改めて参加方法の詳細をお知らせいたします。皆様のご参加をお待ちしております。

#### 《開催概要》

2022年1月に亡くなった森岡清美は、家族社会学、宗教社会学、歴史社会学の諸領域にわたり  
膨大な研究遺産・調査遺産をわれわれに遺してくれた。森岡社会学の一つの特徴は、理論と実証の相  
即的な関係を重視することにある。本シンポジウムでは、森岡がおこなった社会調査と入手された史  
資料、そしてこれにもとづく理論構築のありように着目して、かれの研究遺産の一端を顧みる。

報告1 堤マサエ(山梨県立大学名誉教授)  
長期反復調査が可能になった勝沼調査の背景

報告2 今井昭彦(歴史家・元放送大学非常勤講師)  
森岡宗教社会学との歩み—戦没者慰霊・神社祭祀の視点から—

報告3 渡辺雅子(明治学院大学名誉教授)  
森岡清美の「決死の世代」への視点と分析—ライフコース・コンボイ・コーホート

司会: 藤崎宏子(お茶の水女子大学名誉教授)

主宰: 森岡清美資料室運営委員会

# 『語りの地平』Vol.9

## 原稿募集!!

○投稿エントリーを受け付けています。論文タイトル(仮題でよい)、投稿ジャンル(論文、研究ノート、書評、特集、調査報告など)などを明記し、ホームページのエントリー窓口から申し込んでください(エントリー締め切りは5月10日です)。投稿原稿(特集以外)の締め切りは7月10日を予定しています。

○論文、研究ノートについては査読があります。

○刊行は11月(予定)です。

### 投稿規定

(社)日本ライフストーリー研究所編集委員会決定

2015年12月5日

改正2020年4月3日

1. 本誌は(社)日本ライフストーリー研究所(JLSR)の機関誌であり、原則として年1回発行する。編集委員会の構成は、JLSRの代表理事が編集委員長を務め、運営委員が編集委員を兼務する。
2. 本誌は、ライフストーリー、オーラルヒストリー、ライフヒストリーの研究に寄与する論文、研究ノート、研究動向、フィールドワークの報告、関連文献の書評、JLSR所蔵資料の紹介およびリストなどを掲載する。
3. 投稿資格は原則として前年度会費を支払った会員に限られるが、編集委員会が適当と認めた場合はその限りではない。
4. 論文、研究ノートにおいては同一ジャンルでの連続投稿はできない(研究ノート→論文は可)。
5. 投稿原稿は、未発表のものでなければならない。他の雑誌との二重投稿は認めない。
6. 投稿原稿のうち論文(原著論文)および研究ノートは、原則、査読審査のうえで編集委員会が採否を決定する。その間に、投稿原稿は審査委員会から原稿の加除修正を求められることがある。
7. 編集委員会が会員に寄稿を依頼することがある。
8. 投稿する会員は、編集委員会に原稿のワードファイルのデータを電子メールで送付し、編集委員会の通知にしたがい提出する。
9. 本誌掲載原稿の著作権は、原則として本研究所に帰属する。但し、掲載誌刊行1年を経たあと、著者が著作権の返還を申し出たとき、その申請を正当と認めた場合には返却する。なお、その場合でも、本研究所の運営に必要な事項(本研究所ウェブサイト等での掲載、掲載誌の販売等)については著者の許諾なしで継続実施できるものとする。
10. 掲載原稿の著者は、掲載された論文等を機関リポジトリや自分のウェブサイトで公開することができる。ただし、掲載誌刊行後1年間は公開できないものとする。

11. 論文、研究ノートの掲載者には掲載誌を2部贈呈する。

### 執筆要項

1. 原稿の長さ

原稿字数は以下を標準とする(長くなる場合は、要相談)。

- ・論文:20,000字
- ・研究ノート:8,000~12,000字
- ・フィールドワーク報告:3,200~12,000字
- ・特集(エッセイ):4,000字
- ・書評:2,000~3,200字
- ・他のジャンル(例、資料など)は編集委員会にエントリー時に申し出ること。

2. 要約とキーワード

論文には、500~800字程度の要約をつけ、要約の末尾に、3~5語のキーワードを明記する。なお、論文については、著者の希望によって末尾に英文要約+キーワードをつけることができる。

3. 書式

論文は、表題・執筆者氏名・和文要約・キーワード・本文・注・引用(参考)文献・図表・(ひらがな氏名 所属)の順で構成する。

4. 表記法

英数字は、原則として半角文字。本文中の「。」、「」、『』、「()」「◇」などの記号は全角文字。

節、項には半角数字。「1.」「1.1.」、項以下は、(1)(2)・・・などを用いる。

年号は、原則として西暦を用いる。年号標記の時は「2015(平成27)年」と記す。

5. 文献引用と注

引用文献は、本文中の引用、参照個所の最後に(桜井2002:15)のように、「(著者名 発行年:引用頁)」となる。

注は、本文該当箇所の語句のあとに(右肩ではなく)、1)、2)のように片括弧の半角で記し、本文の最後にまとめて記載する。

末尾の文献リストはアルファベット順で記載する。

和文文献の句読点は全角の「，」「。」を用いる。和文文献は、著者名、出版年、書名、出版社名の順に表記する。翻訳文献は、著者名をカタカナ名として、あとは和文文献に準じる。なお、原書を記したいときは翻訳文献を記載したあとに( )内に欧文文献に準じて記載する。

欧文文献は、句読点をはじめ著者名などすべて半角で表記する。書名、雑誌名はイタリック体とする。

## 受け入れ論文、図書、報告書

2024年1月1日～4月10日（下線は会員）

論文、報告書、著書などをお送りください

- ・齋藤公子,2024『がん患者の集団になにができるか——肺がんの罹患経験の社会学』現代書館.
- ・渡辺雅子,2024「アメリカ・サンアントニオにおける立正佼成会の展開——ヒスパニックが多い地域でのアメリカ人布教」『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』162.
- 石川ゼミ編,2023『大学での経験がもたらしたモノ』松山大学人文学部社会学科.
- ・嶋崎尚子・西城戸誠・長谷川隆博編,2023『芦別 炭鉱〈ヤマ〉とマチの社会史』寿郎社.
- ・細川英雄,2021『自分の〈ことば〉をつくる』ディスカヴァー・トゥエンティワン
- ・細川英雄,2019『対話をデザインする—伝わりとはどういうことか』ちくま新書.
- ・細川英雄,2022『対話することばの市民—CEFR の思想から言語教育の未来へ』ココ出版.
- ・佐々木研究室編,2024『伝統文化のアーカイブ化を考える』青森公立大学経営経済学部地域みらい学科.
- ・深田耕一郎,2021「[家庭]との距離のなかで——大学等に進学する社会的養護経験者への生活支援の取り組みから」『家族研究年報』46.
- ・深田耕一郎,2021「障害はゲームをワクワクさせる——身体に依拠したソーシャルワークのために」『ソーシャルワーク研究』47-2.
- ・奥村隆,2014『他者という技法——コミュニケーションの社会学』ちくま学芸文庫
- ・社会理論・動態研究所編,2023『理論と動態』16.（「好井裕明「戦争を教えるということをめぐる」、山田富秋他編「特集：社会調査に「巻き込まれること」から見えてくる地平、矢吹康夫「沈黙してきたマイノリティが語りはじめ、早々にモデルストーリーが錯綜する」

### 新入会員(2024年4月以降、順不同)

磯本 崇仁  
高木 裕子(実践女子大学)  
松本 美香子(早稲田大学大学院生)

事務局から

すずろごと

今まで画面越しにしかお会いしていなかったオーストラリア在住の会員が、4月に日本に帰国するので研究所に遊びに来たいとメールをいただき、私はとても楽しみにしている！今までも来所した会員は、山登りが好きだからと小海線の旅を楽しんだり、やっぱり来てみないとわからないからと沖縄から飛んできたり。いろいろな人々が出会える研究所でありたいと思ってきたけれど、今年は来客が増える予感。(大谷)

## 2024年度 総会 のお知らせ

2024年6月2日(日)  
13:30～15:30

リアルとオンラインで参加可能の予定です。欠席の場合は委任状(メール連絡で可能)をお出しください。

## 事務局からのお願い

### 年会費の納入についてお願い

研究所は皆さまの会費で運営をしております。年会費を未納の方は、お振込みをよろしくお願いたします。2年目未納の方には、研究誌は発送されませんので、ご注意ください。

### エッセイ募集のお知らせ

ニュースレターに掲載する会員の自由なエッセイを募集しています。日々の思い、LS研究やフィールドに関する気づきや感想など、どのようなことでもかまいません。以下にお寄せください。

E-mail: [jlsr\\_info@lifestory.or.jp](mailto:jlsr_info@lifestory.or.jp)

### (社) 日本ライフストーリー研究所

〒408-0032 山梨県北杜市長坂町大井ヶ森 1176-489  
E-mail [jlsr\\_info@lifestory.or.jp](mailto:jlsr_info@lifestory.or.jp) HP: <http://lifestory.or.jp>

